

〈翻訳〉

Kenneth Clark, *Animals and Men* (1977) 抄訳

Translation of a selected section from *Animals and Men: Their relationship as reflected in Western art from prehistory to the present day* by Kenneth Clark

浅井 千晶¹

要旨

本稿は、『風景画論』や『芸術と文明』で有名な美術史家のケネス・クラーク(Kenneth Clark, 1903-83)が、国際的な展示プロジェクトに際して「芸術における動物」に関する執筆を依頼されて着手した*Animals and Men: Their relationship as reflected in Western art from prehistory to the present day* (1977)の抄訳である。本稿では、原書の第1セクションである“Sacred and Symbolic Animals”全文を翻訳した。

キーワード：動物、人間、西洋美術、神聖な、象徴的な

Animals, Men, Western art, Sacred, Symbolic

はじめに

ケネス・クラーク (Kenneth Clark, 1903-83) はイギリスの美術史家、評論家である。1934年、若くしてロンドンのナショナル・ギャラリー館長となり、以後、オクスフォード大学教授、英国美術協議会会長、大英博物館理事、ロンドン図書館長などを歴任した。イタリア・ルネサンス、特にレオナルド・ダ・ヴィンチのデッサンの研究などの専門的な業績のほか、美術の本質への鋭い洞察にみちた『風景画論』(1949年)、『ザ・ヌード』(1956年)など多数の著書がある。また、1969年にBBCが制作し、人間の存在そのものを広い視野から捉えた13回シリーズの番組「文明 (Civilisation)」によって、国際的に著名である。

日本でもクラークの名は一般に広く知られており、ほとんどすべての彼の著作がこれまでに翻訳されてきたが、本稿で翻訳を試みる『動物と人間——先史時代から現代までの西洋美術にあらわされたその関係』(1977年)は、未邦訳である。

『動物と人間』が執筆された動機は、著者の「まえがき」によると、世界野生生物基金の国際評議員であったFleur Cowlesから「芸術における動物」に関する執筆を依頼されたことである。エジプトやギリシアに始まる西欧文明の長い歴史の流れの中で、動物と人間との関係がどのような変遷をた

どったかを探ることはきわめて広範で挑戦的な課題である。そこでクラークは、「神聖な動物、象徴的な動物」、「観察される動物」、「動物の美とエネルギー」、「愛される動物」、「破壊される動物」の5つのセクションに分けて、それぞれの主題に関する西洋芸術を時代順に論じていった。

本稿では、原書の第1セクションである「神聖な動物、象徴的な動物」全文を翻訳した。翻訳は1977年刊のウィリアム・モロウ・アンド・カンパニー版を底本とし、英宝社から出された大学用英語教科書に付された松村昌家氏による詳しい注釈を参照させていただいた。

翻訳「神聖な動物、象徴的な動物」

フィレンツェのバルジェロ美術館にある一葉の象牙のdiptych (二つ折り書版) には、動物に囲まれたアダムが示されている。彼は動物から少し離れて座っているが、夢見るような表情を浮かべて動物に微笑んでおり、動物は完全に落ちついているように見える。それは4世紀に遡るに違いない。その当時はオルフェウスの表象がまだ一般的だったからである。ギリシアの黄金時代、獣にむかって歌うオルフェウス、エデンの園、ノアの箱舟への乗り込みでさえ、これらは人間と動物が調和してともに生きていた時代の象徴として必要だった。

1 Chiaki ASAI 生活科学部 児童教育学科

受理日：2021年9月2日

それらは想像上の必要性を満たしたが、残念なことに、神話にすぎなかった。記録のある歴史を通じて、動物に対する人間の感情は複雑で可変的で矛盾しており、恐怖、尊敬、欲望、残酷さ、愛から成り立っていた。しかしなぜ黄金時代の調和はけっして存在しなかったのか。その答えは、かつて人間の最高の獲得物とみなされた能力、人間が発する音がたいへん明瞭なので経験を記述することができるのと徐々に認識したことにある。人間は言葉を発見し、他の人間と意思伝達可能になった。それゆえ自分の飢えをみたすときになると、言葉を発しない動物の知恵を上回ることができた。彼は仲間の人間に、穴の掘り方や槍の研ぎ方を伝えることができた。アフリカのブッシュマンやオーストラリアのアボリジニによって繰り返されている伝統を除いて、人類の歴史のこの初期段階の言語的な証拠は私たちにはない。しかし私たちには視覚的証拠は多量にあり、それらはラスコーやアルタミラの洞窟にある絵の遺物のように石器時代に遡る。

これらの洞窟壁画は考古学者による不正直な再構築によって広く知られており、それが完全に誤った印象を与えている。実際、それらはしみや殴り書き同然なのだが、その中に否定できないほどバイソンや他の動物に似ているものがある。狩猟によって生きていた人間に、何が自分たちの洞窟の壁をこれらのたいへん鮮やかで正確な彼らの敵対者の描写で覆わせたのか、尋ねてもよいだろう。先史学者は通常は本質的な議論に基づいて異なる説明をする。彼らによると、これらの絵画は人間に動物をこえる力を与え、狩りでの成功率を高めるためのものである。ある生き物の表象がその生き物の代替として扱われ、魔術的な力が与えられうるとは真実であり、真実であり続けた。魔女や呪術師は破壊しようとする人間の型を刺し貫き、少なくともトロワ・フレールとして知られる初期の洞窟のひとつには、槍で突き刺された動物が示されている。しかしこれは、アルタミラの凸凹な壁にぼんやりと認識できる生き生きとした活力ある動物にあてはまるだろうか。ラスコーにあらわれるごく僅かな人間は活力ある動物と比べるとたいへん貧弱な姿である。彼らが自分たちのすばらしい仲間(=動物)に力を得ていると思っていたと私たちは真剣に信じることができるだろうか。人間はむしろ羨望と称賛を表しているのではないだろうか。生きた記憶としてブッシュマン

が確認してくれるが、先史時代には私たちが想像しうるよりも人間と動物の関係は近かったと考えねばならない。人間はほとんど道具の使い方も覚えておらず、彼の言葉は初歩的だった。動物は繁栄しており、知的な限界よりも彼らのいっそう大きな力と速度によって人間と区別された。個人的には、私は洞窟画の動物は称賛の記録だと信じている。「このように私たちはなりたいのだ」と彼らは間違えようのない口調で言う。「これらは私たちの仲間のもっとも称賛できるものだ」。私の推測は、次の段階の人間と動物との関係で確認できるだろう。彼らの部族の聖なる象徴としてひとつの動物を選択することであり、ゆるやかにトーテミズムと呼ばれるものである。必要な食物を求めて狩をすることと、自分たちより大きな自然の生命力を崇拝にいたるまで称賛すること。もっとも初期の頃から(人間と動物には)確立されたこの二重の関係があり、今日まで存続してきた。

トーテミズムは、たぶん自然発生的に世界中に存在してきた。しかしトーテミズムはアフリカでもっとも強大で複雑だった。初期のエジプト人が大部分はアフリカ系の子孫であるに違いないかぎり、最初にエジプトで、トーテミズムは私たちが宗教と呼んでいるものに変化した。トーテミズムの痕跡がたいへん強いので、エジプト人は芸術において人間と動物をたえず統合しようとした。人間の身体は人間の完全さの模型であるが、エジプトの歴史においてずっと、動物や鳥の頭を保持していた。これらの動物の頭、とりわけ狼アヌビスの頭は、私たちがエジプトの芸術を称賛する妨げになる。ギリシアにおいて逆のプロセス[人間の頭と鳥獣の身体]が創り出したケンタウロスやハルピュイアイは、生物学的にも美的にもより受け入れやすい形の統合にみえる。しかし、たいへん早い段階でエジプト人は、神聖な動物、神王と同等で保護者であるものという概念を発達させ、神聖な動物は、言葉の最上の意味で芸術作品と述べるのできる最初の彫刻作品の主題となる。

あらゆる神聖な動物のなかで、ホルスはきわめて絶対的に神である。ルーブル美術館のホルスの浮彫り細工は、偉大なる宗教的イメージの堂々たる姿、威圧を感じさせるような簡素さをもつ。エジプト芸術の他の神聖な動物は、縮小したスケールで神聖さを伝えている。牛のハトルは、ハトシェプストのようなファラオにとりわけ好まれた。若い羊はカルナックのすべての訪問者が痛々しく気

づくだろうように、アムモンにとって神聖だった。猿のトートは神聖ではあるが、いわば地域的で、ホルスのような普遍的な力ではなかった。トキや、動物たちの神々の座にはるかに遅れてやってきたトートの具現である猫にも、同じことが当てはまる。

エジプトの芸術には神聖な動物が多すぎると私たちが感じるのは容易いだろう。しかしそれらすべては、本来の概念がもつ至聖の統一性からなんらかの力を得た偉大な彫刻美の像を生み出した。信者には気づかれなかったかもしれない小さな変化は、これらの像が芸術家によって作られた事実による。エジプトの芸術家は他の初期文明の自己抹消的な職人とはかけ離れており、典型に生命を与える多様性の力をどのように付すかを知っていた。

このより偉大な生命賦与はさておき、動物が聖なるものに扱われるのには別の理由があった。彼らが話せないことが動物を神秘的にした。あらゆる神は解釈不能であるべきである。「私は私である」のだ。もしホルスが彼に向けられた質問に答えることができ、ハトルが（古代エジプトの）中王国において彼女の地位が突然上昇したことに対してコメントしたなら、彼らの権威の一部が失われたことだろう。

これらの神のような属性をこえて、古代エジプトにおける半分聖なる動物の量は、宗教的感情にかならずともなう愛という精神状態に拠っているところがある。エジプト人は動物を愛した。この意見は、人類学者によって感傷的な現代のナンセンスだと退けられるだろう。しかし、エジプト人の動物に対する感情は、他のいかなる古代人よりもはるかに私たちのものに近いことは明白である。私たちはこのことをサッカラの墓を飾る浮彫り細工にみることができる。ティヤメレルカのような高位の役人が羊と牛の群れの世話をたいへん真摯に考え、彼らの墓の壁を農業の場面で覆うほどであった。これらの浮彫り細工は、エジプト人があらゆる種類の動物を家畜化しようとしたが、今日私たちの仲間である犬や猫と、今も私たちの農場を占める動物たちのみ成功したことを示している。五千年もの間、人間が羊と牛は家畜化できるがノロジカはそうできないのは、なんと不思議な自然の営みだろうか。猫は聖なるものとみなされるより一千年も前からペットであった。ある家が火事になったときあるエジプト人家族の最初の考えは猫たちを救うことで、「彼らは家が焼け落ちる間、

猫を次々と手渡していった」というヘロドトスにある物語は、トーテミズムと同じくらい愛も反映している。古王国の墓にある動物の生活の浮彫り細工は、きわめて情報量が多く感動的である。もっともよく知られたもののひとつは、農夫が背中に子牛をかつぎ、母牛が子牛についていき、なめている様子を示す。ギリシアやローマ、セム族の世界のどこでそのような出来事が共感的に観察され、記録されただろうか。

このようなものが、ナイル川兩岸の確実に連続的な田園生活で発展しえた調和の感覚であった。私たちが便宜的にメソポタミア文明と呼んでいる他の初期文明では状況がより苛酷だったので、そのような感情は存在しえなかった。ウル以降、メソポタミア文明のふたつの偉大な成果は、都市の創造と書かれた言語の発明だった。都市は富を蓄え、互いに交易し戦ったが、メソポタミア人の精神に動物が入ってくるかぎり、動物は力と猛猛さの象徴であった。動物は最初期の円筒型の紋様判にそのようにあらわれ、私たちが「紋章的」と呼ぶようになる様式で互いに向き合い続けた。後のメソポタミア芸術では、ライオンが彫刻されたフリーズ（小壁）の主な主題で、宮殿や寺院の扉の外に守護神としてあらわれる。動物との親族関係の感覚は、王の猛烈な力の象徴に用いることができた動物の力への大きすぎる畏怖の認識によって上回られた。愛は恐怖の利用に変化したのだ。

中東で半ば神聖な動物がライオンと雄牛であった理由を説明する必要はない。ライオンと雄牛の力と能力が好戦的な王国の継承の明らかな象徴にさせたからだ。図版に描かれた雄牛はバビロニアのものである。ペルシアであれば、雄牛は、超自然的にさせるが、けっして畏れおおくはならない羽をもっていたかもしれない。しかし、力の象徴としての雄牛の歴史において、2つの興味深いエピソードは記録に値する。最初のもは古代世界の歴史のごく早いもので、もう一方はたいへん遅いものである。最初のもは、紀元前1500年頃のクノッソスにおける見世物としての雄牛の導入である。これについてはもちろん、乏しくしばしば怪しい視覚イメージによって提供されているもの以外、私たちに情報は少ない。しかし、雄牛が競技場に放たれ、男女両方の競技者が特別な敏捷さをもってその雄牛をいじめたことに疑いはない。人類学者は間違いなくこれを宗教的儀式の一種として解釈したいだろう。しかし、紀元前2000年頃

のクレタ人は、ギリシア本土の同時代人と比べるとあまり宗教的精神をもっていなかった。そして、ミノタウロスの伝説にかかわらず、これは単に娯楽の一形態であると私は考えたい。もしそうなら、クノッソスの闘牛場は古代世界で独特なもので、ローマの円形球戯場やスペインの闘牛場の先駆者となる。ただ違いは、関わったものすべてが生き残ったとはほとんど考えられないものの、雄牛が殺されたり、もうひとつついでに言えば、競技者のひとりが突き刺されたりする表象は存在しない。たぶんクレタ島の雄牛は、クノッソスのフレスコ画の断片的な表象が示唆するよりも、恐ろしいのだろう。なぜなら芸術においてほとんどもっともすばらしい雄牛は、実際はギリシア（本土）で作られたとはいえ、クレタ島人の靈感による作品である。それは、スパルタの近くで発見された「ヴァフィオの黄金盆」である。

（動物に）人間性を与える精神をもつギリシアでは、雄牛の扱いがたいへん異なっていた。雄牛の獐猛さよりも能力にギリシア人は感銘を受けていたので、ギリシアの花瓶やティツィアーノの傑作にみられるように、雄牛は、いやいやではないエウロパを誘拐するゼウスのもっとも好まれる具現となった。最後に私たちは、ミトラの伝説において雄牛が果たした紛らわしい役割を考慮せねばならない。彼は、最初は神だが人間、フリジア帽をかぶった野蛮な兵士になり、剣で雄牛を殺す姿が表象されている。神聖な動物が犠牲の被害者となった。この概念の重要性は明白である。私たちにはミトラ主義の書かれた記録はない。というのもそれは秘密を誓った全員男のフリーメーソンであり、疑いもなく、それはコンスタンティヌスの時代までキリスト教のもっとも恐ろしいライバルであった。贖罪と新たな生の象徴として雄牛を犠牲にすることは、後期の古代世界において霊的必要性がどれほど深かったかを示し、十字架のキリストの犠牲というたいへん異なる形でその必要性は応えられた。

人間は何千年も動物を生贄に捧げてきた。それはもっとも古くからある人間の自然な衝動のひとつであったようだ。今日の私たちはその痕跡を感じないので、なぜ（生贄の）実践が古代の世界中で必要なものになったのかを理解するのは難しい。多くの本がこの主題について書かれてきたが、その議論は巨大な糸束のようで、どこからともなく始まりどこからともなく終わり、実際に解きほ

ぐすのは不可能である。しかし、この混乱し、しばしば矛盾する証拠の中から、二三の巻き糸の束を取り出すことは可能であろう。それは、慰めること、贖罪、血縁関係を主張する必要性である。人間がまだ動物と血縁関係を感じている間は、動物を食べることはその集団に対する犯罪であり、贖いはすべてが関係する儀式的な食事によってのみ達成された。聖餐式は生贄の最初の土台である。しかしたいへんすぐに、神々は生贄を、とりわけ食物が彼らだけに与えられる焼いた捧げものを喜ぶという信仰が生まれた。神々が災害を避けたりなんらかの企画の成功を確実にしたりするために懇願されなければならないほど、より多くの生贄を神々は要求した。『神々は渇く』のである。最後に、生贄は王侯や聖職者の権威の主張となりえた。聖職者は、人々と神との目に見える媒介者としてみられる。それゆえ、動物と人間との関係で最初は贖罪の行為か血縁関係の主張であったものが純然たる破壊行為になり、そこでは貪欲な神の推定された食欲を動物が満たすことになる。しかしそれでも、私たちがパルテノン神殿のフリーズ彫刻の生贄の雌牛、キーツのオードにある「空に向かって鳴く小雌牛」を見るとき、厳粛さを意識するのである。

いずれこの序論 [Animals and Men] 全体のこと、人間による動物の破壊についてももっと語ることになるだろう。ローマの競技場における観客の残酷な衝動を満足させるための動物の虐殺は、疑いもなく、19世紀以前のこれらすべての破壊の中でもっとも忌まわしいものである。しかし、2千年以上にわたる動物の生贄の長い歴史は、動物と人間との関係の気が滅入る側面である。

ヨーロッパでは、キリスト教の確立とともに動物の生贄は終わった。そして、象徴となる動物の選択ほどキリスト教という宗教の絶対的新しさを鮮やかにみせるものは他にないだろう。ミトラとメソポタミアのライオンと雄牛の後に来たのが子羊と羊である。無垢で柔和で従順な羊は、生贄の象徴か善き羊飼いはイエス・キリストの意思に従い彼の保護を享受するものとして存在した。同じ精神で、ハトがワシやタカに取って代わった。子羊は初期のキリスト教の文書に象徴として仄めかされているが、子羊が芸術作品にあらわれるようになるのは、それが秘学的な意味をもった魚と差し替えて安全が期せられるようになってからのことである。羊は5世紀後半の進化したキリスト

教の主要な象徴であり、ラベンナのもザイクに描かれ、「ガラ・プラチディアの廟墓」と呼ばれる遺跡で善き羊飼いの美しい表象からはじまる。

しかし、古代の象徴的イメージは簡単には抑圧されない。雄牛、ライオン、ワシの象徴は奇妙に迂回した道筋でキリスト教の^{イコノグラフィ}図像法に戻ってくる。予言者エゼキエルの最初のビジョンは、視覚的にも文献学的にもほとんど理解不能なイメージを記述しているが、ライオンと雄牛とワシと人間の4つの顔に言及する。およそ600年後、たいへんしばしばエゼキエル書に負っている黙示録の著者は、神の王座の前にいる4つの獣について語る。最初の獣はライオンのようで、次の獣は子牛のようであり、三番目の獣は人間の顔をもち、四番目の獣は飛んでいるワシのようである。このように彼ら(動物たち)はここにいる。私たちの古代の象徴的動物は、四福音書の著者の一人によって書かれたと信じられている聖なる書物、中世初期に圧倒的な影響力があった書物の中に存在し、それについて何ができたろうか。その疑問は、他の多くの初期キリスト教の教義と同様に、聖ヒエロムニスによって解かれた。有名なエゼキエル書の注釈において、彼はこれらの動物は四人の福音書の著者の適切な象徴であると主張した。ワシは聖ヨハネ、ライオンは聖マルコ、雄牛は聖ルカ、そして人間は聖マタイの象徴である。なぜ動物に関する書物[本書のこと]において神学的ファンタジーに時間を費やすのか。その理由は、700年以上の間、芸術におけるほぼ唯一の動物は四福音書の著者の表象だったからである。それらは、エクテルナック福音書やケルズの書のような極端で(驚嘆するほど美しい)様式化したものから、シエナ大聖堂のファサードにある雄牛の偉大なリアリズムまで、そしてドナテルロが制作したパドヴァの聖アントニオ聖堂の祭壇から、サン・マルコ広場の聖マルコのライオン像やフィレンツェにあるドナテルロの「Marzocco (ライオンの紋章)」までである。

ゆるやかに象徴的動物と分類できるような他の3つのカテゴリーが、初期にせよ後期にせよ中世の注目を占めた。最初に、ロマネスク様式の彫刻に頻繁にみられる怪獣がある。それらは獲物に噛みつき引き裂くところが表象され、悪の精力の抵抗しがたい力が象徴される。それから反対の極では、動物寓話集として知られる一連の手稿が存在する。動物寓話集の源泉は知られていない。手稿にはしばしばthe Physiologus (それはただ「博物

学者」という意味かもしれない)として知られる作者の権威が引用されている。彼については、私たちは内的証拠から、おそらくキリスト教時代に入った古代後期に生きた人物だと推測できよう。動物寓話集は情報を与えると主張しており、それらの何冊かは実際プリニウスまで遡る。しかし大部分は伝説や民話に基づいている。例えば、ケンブリッジの大学図書館にある手稿の美しい描画は、古い羽と目を覆う膜を焼き払うために太陽まで飛翔するワシを示している。その後ワシは、若返りのために海に突っ込むことができるのだ。どんな動物寓話集も、鳥と間違えてクジラの背に錨を下す船員たちの有名な場面の図版なしでは完結しない。別の寓話上の例は、犬が水に映るケーキの像を見て、二つとも手に入れようとする貪欲な試みから自分のケーキを失うのを示している。

この話は私たちをイソップに導く。イソップはthe Physiologusとほぼ同じくらい伝説的な人物である。彼の名に結びつけられる寓話は、動物寓話集の道徳的な要素から自然発生的に生まれたものである。しかしそれらは、最初はより庶民的読者層に向けられたもので、初期の手稿の装飾的で想像的な彩飾と比べるとはるかに質素な描画や木版の絵があった。人間は動物の知恵から学ぶことができるという概念は、普及した、ほとんど滑稽なアピールであり、新しい形式で動物との血縁関係の感覚を再び蘇らせた。寓話は19世紀の半ばまでずっと人気があった。ラ・フォンテーヌの作品では、偉大な文学に靈感を与えさせた。図版のイソップ(彼は猫背であると評されていた)は動物たちに囲まれ、彼らから知恵を学んでいる。1665年の英国の本では、イソップは一種の逆のかたちにしたオルフェウスである。この挿絵は初期と後期のイソップの中間に位置する。挿絵画家のフランシス・バーローはヨーロッパの版画や本ですでに流布されているモチーフを用い、そして今度は彼のデザインは広まった最後の象徴的動物、すなわち昔風の宿屋の看板の動物になった。ここにはもちろん紋章学的な起源がある。魅力あふれる「リチャード二世の白鹿」はけっして忘れられない。私はこれらの励ますような象徴が大醸造者による「乗っ取り」をどのくらい生き延びたのか知らない。そこで、行商画家のサンプル本として使われたにちがいないウートンの弟子によるアルバムにある、宿屋の看板のための3つの称賛すべき描画で例証する。

最後に、私は象徴的芸術の時代の後に描かれた、しかし象徴としての効果が忘れがたい力をもつ、3枚の動物の絵に言及する必要がある。最初のものは怒った白鳥を表象する、どちらかといえば無名のネーデルランドの画家ヤン・アーセラインの傑作である。それは、もっともよい時でもやや単調なジャンルであった、17世紀の鳥や動物のふつうの絵から英雄的な獐猛さによって顕著に目立ち、私たちはすぐにそれが専制政治への抵抗の象徴だと認識する。二番目は、自然主義の盛時に描かれたランシーアの『谷間の王者』(1851)である。これほど完全にその時代の堂々とした自己満足を表現するものはヴィクトリア朝文学において他にない。これは疑いもなく大多数の感情であった。しかし少数派であるラファエル前派はまったく反対の視点を取り、メンバーの一人であるホルマン・ハントはこの時代のごく僅かな宗教的絵画の一つである『身代わりのヤギ』(1854)においてそれを表現した。その絵は信じられないほどの困難を伴って死海の岸辺で描かれ、ホルマン・ハントは聖書とタルムードの両方を靈感の源に用いて、どのようにヤギを犠牲の象徴にしたかを細部まで描写した。その絵が展示されたとき、二・三の批評家はヤギの顔に浮かぶキリストのような諦念の表情に困惑した。大多数は単におろかな老いたヤギだと考え、なぜハント氏がわざわざ苦勞してその絵を描いたのか想像できなかった。人間は象徴的に考えることをやめ、人間の動物に対する感情は尊敬から好奇心へと変化した。それは人間の想像力にとって喪失であった。それが最終的に動物の理解に対して利益となるかどうかはまだわからない。

使用文献

Clark, Kenneth. *Animals and Men: Their relationship as reflected in Western art from prehistory to the present day*. William Morrow and Company, 1977.